

著者の専門分野である金属素材（鉄鋼や非鉄金属など）の製造の立場からまとめた結果の一部を紹介したい。

図1は、入学前後において興味の対象が変化した学生の割合の学年別比較を示す。その割合は、高学年ほど高くなっているが、専門教育がほぼ終了する学部4年生で急激に増加し、半分以上の学生の興味の対象が入学後に変わっていることがわかる。この傾向は、金属素材（鉄鋼や非鉄金属など）の製造部門において顕著である（図2）。材料系学科の学生は、学部4年次の4月末に講座配属され、その後学部生は卒業論文、大学院生は修士論文のための研究に取り掛かるため、学部4年次以上の学生においては、興味の対象が変化する理由として、本人や配属講座の研究内容に影響されることが予想された。そこで、この影響が出ないと考えられる学部3年次以下とこの影響が出ると予

想される学部4年次以上の学生に分けて、興味の対象の変化する動機についてまとめた結果の一例を図3（学部3年生）と図4（修士2年生）に示す。予想通り、学部3年生では学生実験も含めて約80%が授業内容に影響されており、修士2年生では本人と配属講座の研究内容への依存度が高いが、修士2年生においても、約30%の学生の興味の対象の変化の動機が学部時代の授業内容に依存していることが特筆される。この傾向は、他の学年においてもほとんど変わらない。

このアンケート結果から、良い人材を集めるためには、高校生への効果的な情報伝達（これに関するアンケート結果は誌面の都合上割愛する）を始めとして、地道に教育することが、遠廻りのようで、長い目で見れば最も近道である、というごく当たり前の結論が再確認されたと言えよう。

研究学園都市構想

岡 賢

(新日本製鐵(株)名古屋製鐵所品質管理部)

当地区は、第4次全国総合開発計画において「世界的な産業技術の中核圏域」とされ、高次都市機能の集積と共に産業の集積と研究開発機能の強化¹⁾が方向づけられた。この中核が名古屋市の都市機能との連携の下、愛知、岐阜、三重3県に散在する「名古屋東部丘陵」「東濃」「鈴鹿山麓」の3つの「研究学園都市」である。これら研究学園都市は各々が、幾つかの自治体にまたがる広い地域に、核となる研究複合体を中心に大学や研究所などの研究開発機能（表1）とその成果の応用、新産業創出を図る企業団地などの生産機能を拠点配置するものであるが、併せて、全体を有機的に機能させるため、研究者・技術者の交流と産官学の共同研究を促進する仕組みや、拠点間を結ぶ交通、職住近接の生活環境の整備を行う事になっている。

名古屋東部丘陵研究学園都市（あいち学術研究開発ゾーン）は、濃尾平野の東を縁取る丘陵地帯に広がり、既存の機能の集積を活かしつつ6地域で特徴ある整備が図られる。この内、志段味地区（名古屋市）では緑と水辺のある快適な居住空間と研究機能と先端産業が調和する新しい街、「サイエンスタウン²⁾」

の造成が始まっており、誘致研究機関や支援施設等計画の中心が煮詰まりつつある。八草地区（瀬戸・豊田市）では技術・文化・交流をテーマとする万博（2005年）の誘致構想とそれに合わせた地域開発計画とが関連づけられて検討が進められている。この周辺には最近、大学や民間研究所の集積が急であり、構想の先導的役割を担う科学技術交流センター計画の第一歩として秋には、交流支援の財団が発足する。

東濃研究学園都市は、地元主体で最も早く検討された構想であり、コアとなる国立3研究所が山岳の美しい自然の中で工事中ないし活動中である。更に、研究者交流、共研、工場団地、文化、レクリエーション、居住等一連の整備構想があり、この内、民間研究所、研修所の集積するフロンティア・リサーチパークの分譲が来年度始まる予定である³⁾。

鈴鹿山麓研究学園都市は、広域の地域振興計画「ハイテクプラネット21」構想⁴⁾の中核となる3つの拠点地域で構成され、その周りを文化、国際交流、ソフトウェア開発を特徴とする3地域がとりまく形で整備が図られる。中心の鈴鹿山麓リサーチパークには国際環境技術移転研究センターが活動を始めている他、交流施設計画が具体化しつつあり、他の拠点地域でも研究機関の集積、先端企業誘致など整備計画が進められている。

一方、静岡県では、浜松市を母都市として、「音と光と色の未来都市」の形成を目指す「浜松地域テクノポリス」構想⁵⁾、また、隣接する豊橋市では、「サイエンス・クリエート21」構想⁶⁾が、それぞれ着実な歩みを見せている。両者共、交流・共同研究組織化機能と開放型研究施設を軸に、大学の知的ポテンシャルを新しい地場産業の創出に転化するの狙いの地元主導の構想である。浜松では都田地区を中心にコア施設の他、大学、研究機関の集積と新しい企業の進出が進んでおり、平成4年からは「産・学・住・遊の機能が調和し世界に開かれた地域」を目指した新しい段階に入ったとされている。豊橋の構想は民間主導から官民共同事業に至った産学官連携による地域開発の、また、大学の地域振興への係わり方の新しい試み⁶⁾とされ、構想の「交流、研究開発ステップ」から「企業化ステップ」に入り、「ベンチャービジネスパーク」の造成が始まっている。

いずれの構想においても、自然保護と文化、スポーツ、レクリエーション施設を伴った質の高い住環境の整備が重視され、豊橋浜リゾート⁶⁾、浜名湖頭脳公園⁵⁾などリゾート環境整備を包含する場合も多いのが、豊かな自然と開発余地の残されているこの地域ならではの特徴であろう。

何分にも広い地域に分散し多極的に推進されている各構想で

表1 主要な施設（+活動中 ・決定、着工 *構想）

中核研究複合体 Ns 名工大第2キャンパス* Ns 名古屋工業技術研究所移転* No 岡崎国立共同研究機構+ T 核融合科学研究所+ T 超高温材料研究センター+ T 日本無重力総合研究所・ Sr 国際環境技術移転研究センター+	開放型共同研究施設 Ns 名古屋産業科学研究所* T プラズマコンソーシアム* Sr 開放型共同研究施設* H 浜松工業技術センター+ H 静岡大地域共同研究センター+ TY 豊橋サイエンスコア+ TY 豊橋技科大技術開発センター+
その他大学・研究機関 Ns 理研バイオ・メテックコントロール研究セ・ Sr 三重県環境総合研究センター* H 常葉学園浜松大学+	交流・研修・共研組織化機能施設 Ns 研究開発支援施設+ Ny 科学技術交流センター・ T クロスオーバーセンター* Sr 学園都市センター・ H 浜松地域テクノポリス推進機構施設+ H 浜名湖国際頭脳センター+ TY 豊橋サイエンスコア+

(地域) H: 浜松 TY: 豊橋
 Ns: 志段味 Ny: 八草 No: 岡崎
 T: 東濃 Sr: 鈴鹿山麓リサーチパーク

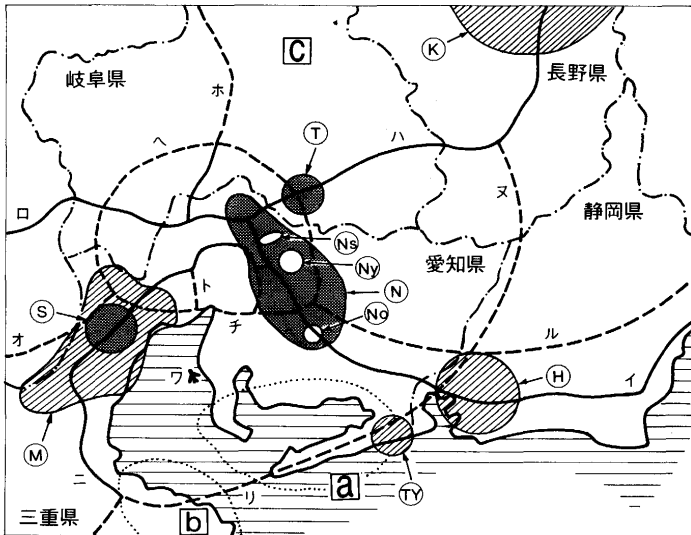
表2 研究学園都市の機能分担 (研究対象)¹⁾

東濃	名古屋東部丘陵	鈴鹿山麓
次世代エネルギー	ライフサイエンス	環境保全技術
超高温材料	メカトロニクス	新素材
極限環境利用	マイクロマシン	バイオテクノロジー
ファインセラミックス	バーチャルリアリティー	産業関連
	航空宇宙関連	社会科学
	ファインセラミックス	

表3 研究学園都市を支える道路交通網⁷⁾

(・供用中, 拡充, 新設決定 * 構想)

拠点地域間	母都市直結	域外交流
名古屋環状2号線・東海環状自動車道・伊勢湾岸道路・伊勢湾口道路*・鈴鹿亀山道路*	名古屋都市高速道路・名古屋瀬戸道路・ガイドウェイバスシステム志段味線・磁気浮上リニア東部丘陵線*	第二東名, 名神高速道路・三遠南信自動車道・東海北陸自動車道・中央リニア新幹線*・中部新国際空港*



- T 東濃研究学園都市
- N 名古屋東部丘陵研究学園都市
- Ns 志段味地区
- Ny 八草地区
- No 岡崎地区
- S 鈴鹿山麓研究学園都市
- M ハイテクプラネット21
- H 浜松地域テクノポリス
- TY サイエンス・クリエート21
- K テクノハイランド信州
- イ 東名高速道路
- ロ 名神高速道路
- ハ 中央自動車道
- ニ 東名阪自動車道
- ホ 東海北陸自動車道
- ヘ 東海環状自動車道
- ト 名古屋環状2号線
- チ 伊勢湾岸道路
- リ 伊勢湾口道路
- ヌ 三遠南信自動車道
- ル 第二東名高速道路
- オ 第二名神高速道路
- ワ 中部新国際空港

a 三河湾地域リゾート構想 b 国際リゾート三重サンベルトゾーン構想 c ニューリゾート基地構想

あるので、適切な機能分担(表2)と相互連携が課題であり、その在り方が多方面で議論されている。また、研究学園都市間、拠点地域間を繋ぎ、母都市とを直結する道路交通網(表3)や情報通信網の整備が進められ、第2東名・名神高速道路、リニア中央新幹線計画、中部新国際空港構想の三大プロジェクトも、当地域と域外の研究学園都市あるいは海外との交流・連携に重要な役割を果たすものとして21世紀初頭の実現を目指して推進が図られている。

鈴鹿から浜松まで星雲のように連なる一帯が、各拠点地域の

特徴を發揮しながら有機的につながり、先端技術を世界に発信し、国際的交流・共同研究の拠点となる日の来ることを願って、今後も見守っていきたい。

参 考 文 献

- 1) 東海地域研究学園都市構想調査推進研究会報告書 平成5.5.12
- 2) 志段味まちづくり構想 パンフレット 名古屋市 平成3.3
- 3) 東濃研究学園都市推進連絡協議会パンフレット 平成5
- 4) 三重ハイテクプラネット21構想パンフレット 三重県 平成5
- 5) 浜松地域新技術産業都市構想推進協議会パンフレット 平成5
- 6) 先端技術がひらく地方都市 本田波雄 日本放送出版協会
- 7) 環伊勢湾地域整備連絡会議報告書 平成4.8

“外人”を意識させる日本

ラジャイ アリレザ
(名古屋国際センター広報企画課)

日本に滞在する外国人の中で、芸能人とスポーツ選手について学生が環境に恵まれているグループだと思う。自分もそのグループに属していたので本当の外国人の悩みを理解していないと言える。しかし十二年間日本に滞在し、それを自分の第二の祖国だと思っている一人の外国人として日本社会での外国人の立場を考えてみたいと思う。

自分も含めて、初めて来日する外国人の多くは祖国でもっている日本のイメージと現実の違いに出会う。外国での日本の優れた工業製品と経済力についてのニュースが、近代的で冷やかなイメージをもたらししている。しかし、来日して初めて、日

本にはまだ本来の人間らしい姿が根強く残っていることに気づく。また、近代的な面と伝統的な面の見事な調和にも驚かされ、感心させられることが多い。「伝統のある所に暖かい心がある」という言葉を毎日のように認識する一方、「日本にはいつまで?」というような質問で自分が一時期のお客さんだということを知られる。しかし、この日本が好きになって深入りする外国人も少なくない。

学生時代を終え社会に出ると直ぐに、自分がお客さんではなくなっていることに気づく。また、日本社会のシステムとの係わりが深くなるほど、自分がどんな立場にいるかが分かるようになる。日本と日本人に対してのそれまでの気持ちをもとに理解しようと努力するが、理解しきれないところが沢山出てくる。

例えば、税金などの負担については市民あるいは国民と見なされているのに、それぞれに与えられるべき選挙権のような権利が与えられていないこと。いくら日本に長く住んでいても、